奈良県立橿原考古学研究所紀要
考古学論攷　第 40 冊　2017 年

奈良市中山横穴墓の研究

絹　畠　　歩
前　田　俊　雄
持　田　大　輔

目　次

Ⅰ．はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
Ⅱ．中山横穴墓の位置と問題の所在 ・・・・・・・・・・・・ 45
Ⅲ．中山横穴墓出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
Ⅳ．考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
Ⅴ．結語 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

論　文　要　旨

平成 14 年、奈良市中山町で横穴墓のわずかな痕跡とともに陶棺と土器が不時発見された。本稿はその出土遺物を整理し，考察した報告である。陶棺片を整理した結果、形態の異なる 4 群に分かれ、そのうち 3 群は棺として採用されていたことを明らかにした。須恵器は蓋坏・高坏・横瓶・提瓶・すり鉢・壺・甕などから構成され、このうちすり鉢の出土は特筆される。出土した陶棺と須恵器から 6 世紀後半の中で大きく 2 時期にわかれることが明らかとなった。また以上から想定される被葬者像について、近年調査成果が報告された赤田横穴墓群との関係も含めて考察した。

絹畠　歩（きぬはた　あゆむ）
　奈良県立橿原考古学研究所　主任技師
前田俊雄（まえだ　としお）
　奈良県立橿原考古学研究所　主任研究員
持田大輔（もちだ　だいすけ）
　奈良県立橿原考古学研究所　主任研究員

Ⅰ．はじめに

本稿では、奈良県奈良市中山町で道路建設中に不時発見された陶棺と、それにともなう土器類を紹介する。

本遺物群が発見された経緯は、先ほど発行された奈良市教育委員会による『赤田横穴墓群・赤田１号墳』の発掘調査報告書（奈良市教育委員会 2016）で既に紹介されている。要点をまとめると、奈良県奈良土木事務所による地方特定道路整備事業、奈良精華線（県道 52 号線）工事をすすめるなか、平成 14 年 6 月 8 日（土）に丘陵斜面の切土作業中に遺物の出土が認められ、週が明けて 6 月 10 日（月）に通報があった。当研究所所員および奈良市職員が現地に到着した時点で、損壊した陶棺破片のほか、須恵器等の遺物が確認された。これらの遺物は原位置を保っておらず、一箇所に固められていた状況であったという[1)]（写真 1）。遺物がともなう遺構は重機掘削により全壊しており、切土面に横穴墓の奥壁の一部とみられる痕跡を僅かに残すばかりであった（写真 2･3）。このような状態であったため、現状では南方に開口部をもつ横穴墓が最低でも 1 基存在したことが推定されるにとどまっている。その後、発見届の提出を経て、遺物は当研究所に保管されることになり、現在に至る。また、遺跡名として中山横穴墓（奈良県遺跡番号：05A-0156）を付し、遺跡地図にも登録されるに至る（以下、本遺跡については中山横穴墓と呼称する）。

このように中山横穴墓とその遺物群は、正式な発掘調査を経たものではなかったため、その存在は一部関係者に知られるのみであった。また、現地より回収された遺物も、上記の理由により正式に整理・報告する機会に恵まれず、陶棺や土器類の資料的位置づけや、そこから復原的に導き出される中山横穴墓の性格（単独墓なのか複数墓なのかを含め）は不明確であった。

近年、奈良市西大寺赤田町赤田横穴墓群に代表されるように、良好な陶棺出土事例が増えており、奈良盆地北部における陶棺墓制の実態を解明するうえで、新たな状況が生まれつつある。これを正確に把握するためにも、中山横穴墓陶棺とそれに伴う土器群について、資料化をはかることは、意義があるものと考える。

（持田大輔）

写真１　現地に集積された陶棺・土器類

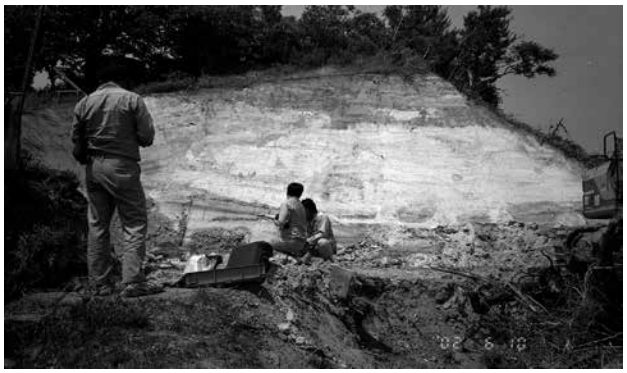

写真２　現地の状況　中央人物の背後に墓室痕残る

写真３　切土面に残された墓室奥壁の痕跡

Ⅱ．中山横穴墓の位置と問題の所在

(1) 中山横穴墓を取り巻く環境

資料を紹介していく前に、中山横穴墓の位置と、これを取り巻く環境について確認しておきたい。中山横穴墓は奈良盆地の北西部を流れる椋谷川沿い、現在の奈良精華線（県道 52 号線）が通る中山大橋の北側にあたる（図 1）。椋谷川は、元禄年間に造られた大淵池の周辺に水源を発して東流したのち、北より流れ来る押熊川と合流、秋篠川となって南へと流れを変更し、平城宮西縁を南下、唐招提寺、薬師寺の東を抜け、九条にて佐保川と合流していく（平城村史編集委員会 1971）。椋谷川北岸に沿って西から延びる微高地の東端部分に形成された

「外山」と呼ばれる丘陵の斜面に、中山横穴墓が築かれている。ここは椋谷川と押熊川との合流地点に近く、眼下に奈良盆地へと連なる平地が広がる要衝に位置しており、この地域を本貫とした有力者層の奥津城として位置づけることができる。

近辺の古墳時代の遺跡は、佐紀古墳群の五社神古墳とその陪塚のほか、盾形埴輪・円筒埴輪が確認された秋篠少年院古墳（墳形規模不明）とその周辺に数基の小墳・遺物散布地、さらに南方には形象・円筒埴輪をもつ西山1・2号墳（方・10m、円・10m）、秋篠寺推定地内のドヨー塚などが知られる（図1）。また、中山横穴墓と同様、陶棺をともなう横穴墓として、中山横穴墓と秋篠川を挟む平城山丘陵の谷間にある津風呂町陶棺出土地、その南で五社神古墳の北側に接する狐塚横穴墓群、そして上述の赤田横穴墓群などを挙げることができる。赤田横穴墓群は平野に面した丘陵突端部に南面して造営されるなど、中山横穴墓の立地と類似している。周辺では五社神古墳以外は、前方後円墳など首長墓と見なせるような古墳はなく、中・小有力者層の墳墓のみ確認できるという現況である。

古代以降の遺跡は、中山横穴墓の造営された丘陵の西側に、平城宮への瓦供給で知られる中山瓦窯群がある。平城京の北辺にあたる平城山丘陵には、平城宮・京へと瓦を供給した多くの瓦窯が知られており、その一角を占めている。また、光仁朝の建立とされる秋篠寺のほか、その西側には火葬墓群が知られている。

(2) 土師氏と陶棺分布、その問題

さて、奈良盆地北西部は古代より土師氏の本貫地との指摘がある（直木 1960）。土師氏は、埴輪創出伝承で知られる野見宿禰を祖とし、喪葬や土器生産に携わった古代氏族とされるが、この地域との関係は『続日本紀』の土師氏改姓記事に由来している。桓武朝の天応元年（781）六月、土師宿禰古人・道長が願い出て菅原朝臣に、そして延暦元年（782）五月、土師宿禰安人らが秋篠朝臣の姓を許され、さらに延暦四年（785）八月、右京の人土師宿禰淡海とその姉諸主らに秋篠宿禰を、延暦九年（791）にはさらに土師宿禰諸士らに大枝の姓が許されている。延暦元年五月二十一日には、土師宿禰安人の言として、「菅原」の姓が居地に由来することが説かれており、「秋篠」に関しても同様と考えられる。菅原は奈良市宝来山古墳の北側一帯に地名が残り、また秋篠は佐紀古墳群西側一帯を示すと考えられる。中山横穴墓の位置は、西大寺所蔵京北班田図では添下郡京北二条三里上丸部里にあたる。「外山」の東に広がる里内の平地には「秋篠田」の名を示した坪が多数あり、また、中山瓦窯は隣接する三条三里「瓦屋里」に含まれ、平安期において「秋篠」の範囲に含まれる[2)]。このことから、奈良末～平安初頭において、奈良盆地北西部に土師氏が居住しており、分布が重なる陶棺葬送風習との関係性を指摘する議論が影響力をもっている（丸山 1973）。ただし奈良盆地北西部以外では、必ずしも土師氏居住地に陶棺がともなうわけでないという指摘もある（吉田 1973）。

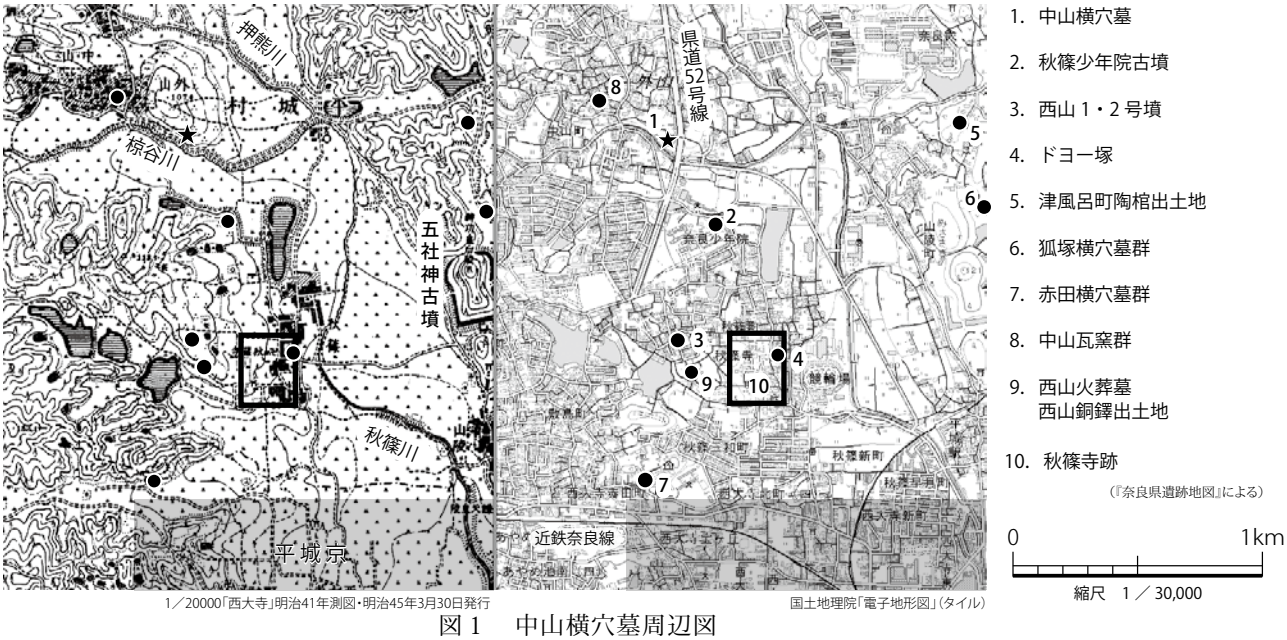

図1　中山横穴墓周辺図

近年の文献史学では、土師氏は6世紀後半までは「土部連（はじべ）」として喪葬を職掌としており、7世紀以降、土器生産に携わる複数集団と統合して、「土師連」と姓を改めたこと、また、祭儀用の土器生産を職掌とする「贄土師連」とに分裂、古墳葬制の変化により職掌を活かす機会が減少して没落傾向にあったことなどが指摘されている（溝口 2010）。喪葬に直接関係する奈良市菅原東遺跡の埴輪窯の存在や、五社神古墳・宝来山古墳など佐紀古墳群という大規模古墳群周辺に陶棺が分布する状況を評価するのであれば、当地における陶棺葬送風習は、土師氏を構成した「土部連」「土部」の一部集団が採用した墓制であった、とまでは言えるかもしれない。埴輪製作技術をもち、焼成窯を有したこの集団が、古墳築造の終焉に伴い職掌解体する過程で、中山瓦窯にみられる瓦生産に組み入れられた状況も予想される。

秋篠、菅原、大枝（京都盆地西部・乙訓地域）以外にも土師氏が多く居住したとされる土地として、河内地域が指摘されている（直木 1960）。この河内地域においても、百舌鳥・古市など大規模古墳の周辺に居住し、造墓・埴輪生産に携わったとみられる点が共通する。さらに東部の丘陵沿いの横穴墓群に陶棺の分布が認められ、古墳廃絶後には、古墳築造にも匹敵する土木技術と瓦生産技術とが組み合わさった土塔が築かれるなど、土師氏の職掌・職能を類推させるような事象も確認される。奈良盆地北西部と比較して広範囲にわたるが、類似した状況が断片的にでも存在することは注目に値しよう。

このように、奈良盆地北西部は、土師（土部）氏の動向を文献史学の成果と考古学研究成果の両面から探ることができる貴重なフィールドである。現状では牽強付会の部分も多々あるが、本稿における中山横穴墓資料の報告をはじめ、今後の検討材料の充実による解明が待たれる。（持田）

Ⅲ．中山横穴墓出土遺物

（1）陶棺　（図２～４）

中山横穴墓からは複数の陶棺片が出土した。接合するものもあるが、完全な個体となるものはなく、多くは小破片である。出土状況が不明であることから、形態・胎土などの要素から分類を試みた結果、4群を抽出することができた。以下、その抽出できた群ごとに報告を行う。

陶棺A群

最も個体が残存し、接合できた群である。蓋は一部しか残存していないが、脚部から身部にかけては多くの破片が接合した。土師系亀甲形陶棺に復元できる。色調は黄橙色を呈する。

図３－１・２は蓋部破片である。1は長側面側蓋下端部を含む破片である。水平突帯が2条巡り、その間に垂直方向突帯が貼り付けられる。2と合わせて水平突帯が2段構成になるものと想定される。垂直方向突帯は段ごとに互い違いになるように構成される。突帯の幅は3.5～4.0cm、高さは0.7cmである。下端から1段目の水平方向突帯には一部沈線が確認できる。2段目の水平方向突帯やや下に長径5.4cm、短径4.1cmの焼成前穿孔が施される。蓋下端部は下端外面直上に水平方向突帯が貼り付けられ、内面も粘土を充填して厚くしている。内外面ともにナデ調整が施される。2は棺蓋頂部を含む破片である。外面の一部に赤色顔料が付着している。断面の形態から垂直方向突帯は2段目の水平方向突帯近くまで残存していると考えられる。内外面ともにナデ調整が施されるが、内面の一部に指頭圧痕が確認される。

1・2から想定される蓋高は約30.0cm、幅は約58.0cmである。

図2は棺身～脚部である。最も破片が接合した。短側面と反対側の端部は直線状になっており、糸状工具による切断痕跡が認められる。身部高は45.0cmを測る。身上端部は、上端部やや下に水平方向突帯を貼り付け、受け部を形成する。受け部の厚さは4.6cmを測る。突帯は水平方向に2条あり、その間に垂直方向突帯を貼り付ける。垂直方向突帯は段ごとに互い違いになるように構成される。2段の水平方向突帯の区画は、高さが上段で13.0cm、下段で21.2cmとなっており、下段の方が大きい構成となっている。突帯の幅は平均で約4.0cmを測り、高さは約0.8cmを測る。短側面には垂直方向突帯が4本下段に貼り付けられる。短側面から中央切断面までの長さは111.0cmである。短側面中央部には焼成前に長径6.4cm、短径5.2cmの楕円形の穿孔がなされる。短側面長は下端部で68.0cm、受け部は58.5cm（想定値）である。身側面の厚さは2.2cmを測る。底部には焼成前約1.2cmの小孔が2箇所確認されるが、脚部の位置と

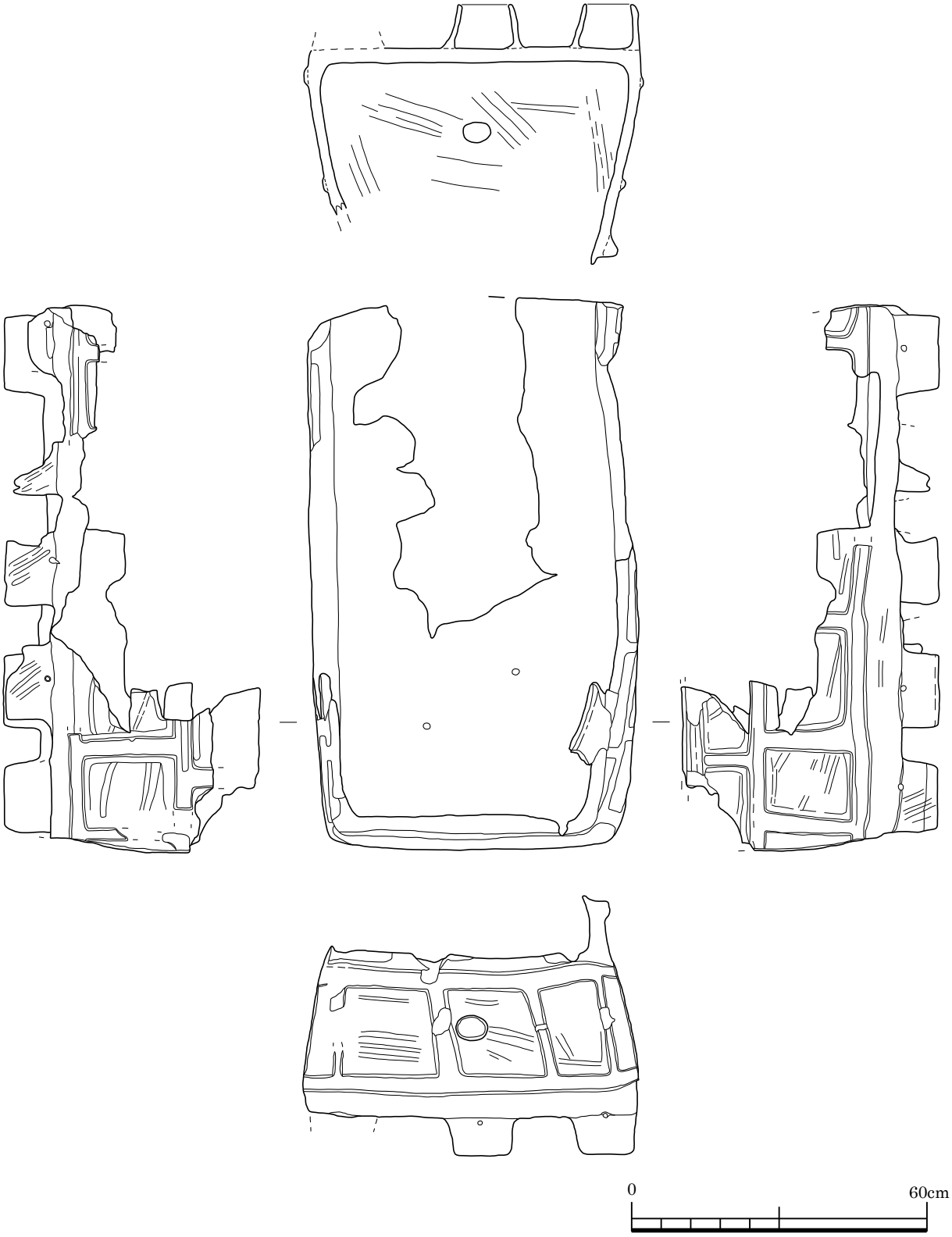

図２　中山横穴墓出土陶棺（1）（S = 1/12）

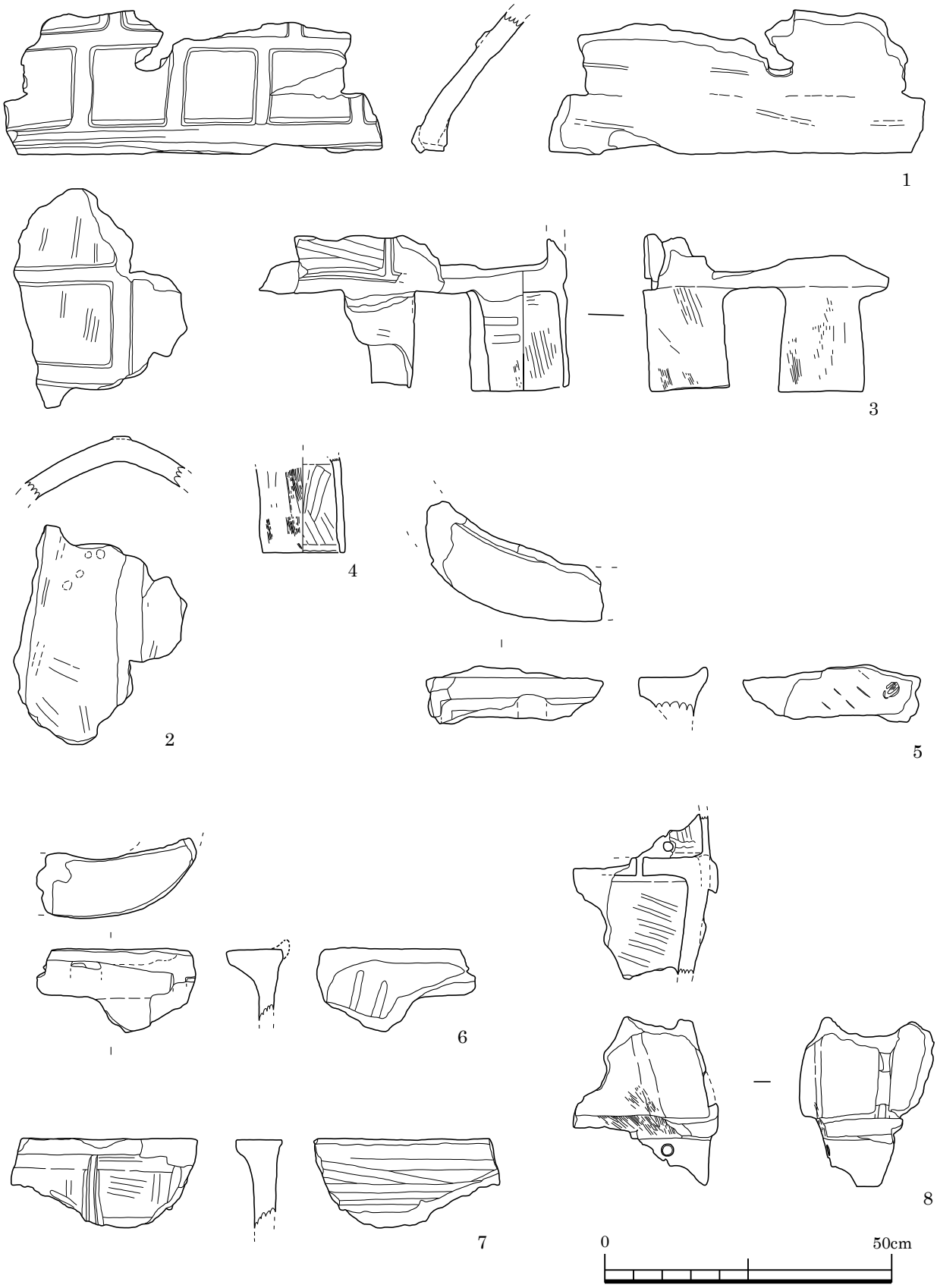

図３　中山横穴墓出土陶棺（2）（Ｓ＝1/10）

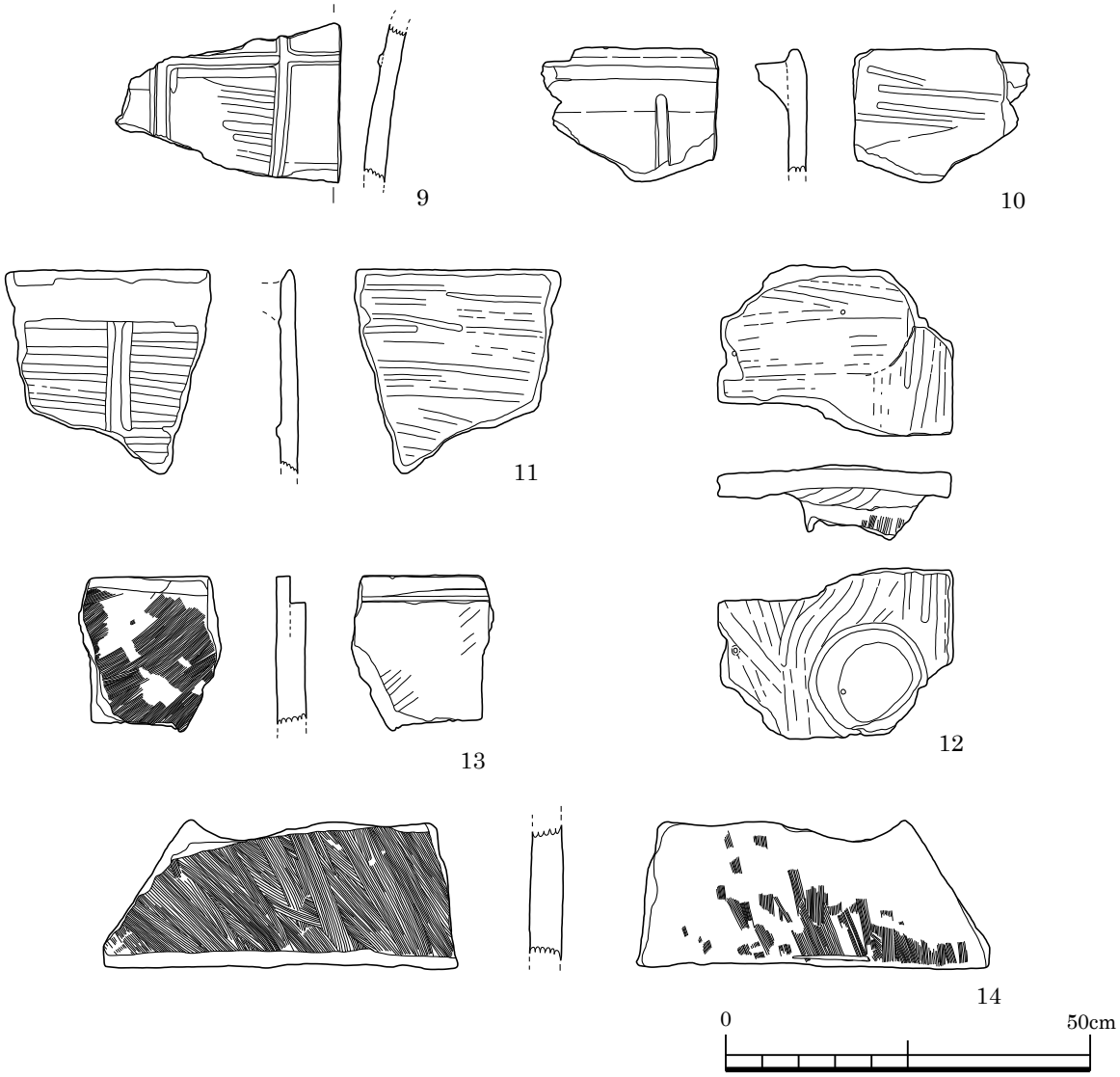

図４　中山横穴墓出土陶棺（3）（S＝1/10）

は一致せず、アトランダムに配置される。脚部は３列５行分が認められる。脚部の径は平均で約 14.0cm、高さは 9.5cm である。底部との接合部やや下に焼成前の小孔が穿たれる。小孔は短側面・長側面ともに外側に穿たれ、短側面と長側面のコーナーに当たる脚部には２箇所穿たれている。脚部外面には刷毛目調整、内面にはナデ調整が施される。

図３－３は棺身～脚部である。図２の反対側の短側面・長側面コーナー部分である。脚部は 1cm あたり６本程度の刷毛目調整ののちに横方向のナデ調整が施される。

４は脚部である。外面は 1cm あたり８本程度の刷毛目調整、内面は縦方向のナデ調整が施される。色調・胎土が類似するため、この群に分類できるが、他の脚部とは形状・調整が異なるため別個体の可能性も残る。

陶棺 B 群

本群では蓋破片が認められなかったが、土師系亀甲形陶棺に復元できる。色調は橙色を呈する。

５～７は陶棺身部上端片である。５と６は長側面と短側面の間のコーナー部分であり、７は長側面のものである。上端に水平方向突帯を巡らし、受け部とする。５・６には突帯内側に高さ 1.6cm、厚さ 2.0cm の突帯が付属するが、７には認められない。短側面のみに付属すると考えられる。上端の厚さは短側面コーナー部分で 11.8cm、長側面で 8.1cm を測る。外面には垂直方向突帯が貼り付けられる。受け部である上端部の水平方向突帯を貼り付けたのち、垂直方向突帯が貼り付けられる。垂直方向突帯の幅は 3.0cm、高さは 1.0cm を測る。内外面ともにナデ調整が施される。５の内面には板状工具痕

跡が明瞭に残る。また、受け部上面及び外面の一部には赤色顔料が付着する。

8は棺身部～脚部片である。短側面と長側面が一面ずつ見られるコーナー部分である。身部と脚部の接合部には水平方向突帯が1条巡る。その水平方向突帯が貼り付けられたのち垂直方向突帯が貼り付けられるが、短側面側及び長側面側の一部の突帯は剥離し欠損している。垂直方向突帯は、長側面側は直線的だが、短側面側は斜向している。突帯は幅2.2cm、高さ1.5cmを測る。突帯剥離箇所に刷毛目調整が見られることから、突帯を貼り付ける前に刷毛目調整が施されていることがわかる。側部内面はナデ調整が施される。側面の厚さは約3.0cmを測る。棺底部には焼成前に径1.0cmの小孔が穿たれる。脚部の中心ではないが、脚部の範囲内に収まる。底部内面はナデ調整が施される。底部の厚さは3.0cmである。脚部は径約12.0cm、厚さ1.2cmを測る。焼成前に径2.2cmの円形透孔が穿たれる。脚部外面は刷毛目のちナデ調整、内面は縦方向のナデ調整が施される。粘土接合痕が明瞭に残る。

陶棺C群

土師系亀甲形陶棺の破片である。色調は橙色を呈する。図4－9は棺蓋である。上側に向かって傾斜がかかる一方で、下側に向かい直線状を呈して肥厚することから、蓋下端部に近い破片と考えられる。水平方向突帯が1条、垂直方向突帯が2条認められる。垂直方向突帯貼り付け後に水平方向突帯が貼り付けられる。突帯は幅約2.0cm、高さ約0.5cmを測る。内外面ともにナデ調整であり、外面は水平方向に施される。最大厚は3.0cmである。

10・11は棺身上端部片である。11は受け部である上端部水平方向突帯が欠損している。受け部は上端よりやや下に形成される。受け部の厚さは6.8cmであり、身の厚さは2.2cmである。水平方向突帯と垂直方向突帯がそれぞれ1条認められる。上端部に水平方向突帯を貼り付けて受け部を形成したのち、垂直方向突帯が貼り付けられる。突帯は幅約3.5cm、高さ約1.0cmを測る。調整は内外面ともに横方向のナデが施される。

12は棺底～脚部片である。端部の一片は直線状となり、焼成前に糸状工具により切断された痕跡が残ることから、中央部付近の破片であると考えられる。棺底部には焼成前に小孔が2箇所穿たれる。一方は脚部内に収まるが、もう一方は脚部の位置ではなく、アトランダムに穿たれている。底部内外面ともに不定方向のナデ調整が施される。脚部は径15.5cm、厚さ0.8cmを測る。脚部外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデ調整が施される。底部の厚さは3.5cmを測る。

陶棺D群

土師系陶棺の身側面の破片と考えられるもののみである。これにより棺として使用されたというよりは、棺台や磚の機能を果たす板状土製品として使用された可能性が高いと考えられる。色調は灰黄色を呈する。

13・14は同一個体であり、棺身側部片の可能性がある。13は端部であり、端部から長さ3.5cmは内面が一段薄くなっている。厚さは4.0cmを測る。外面は1cmあたり8本程度の刷毛目調整、内面はナデ調整が施される。内面の一段下がった部分では、横方向のナデがなされており、その方向に沿って藁状痕跡が一条認められる。14は、外面は1cmあたり8本程度の刷毛目調整、内面は同様の本数の刷毛目のちナデ調整が施される。内面下部には貼り付け痕跡が残り、身底部がこれより水平方向に接合されていた可能性がある。厚さは4.0cmを測る。

以上、陶棺片を4群に分類し、報告を行ってきた。図3－4の脚部片のように群の中で別個体の可能性もある破片も存在するが、基本的に1群1個体の陶棺に復元できることが予想される。（絹畠　歩）

（2）土器　（図5・6）

中山横穴墓では陶棺とともに、多数の須恵器をはじめとする土器が出土している。これらの土器は器種も多く、また残存状況も良いものが多い。

以下、器種ごとに土器の詳細を述べていく。

図5－1～11は須恵器の蓋坏である。1～6は坏蓋で、口径が13.8cm～14.8cm、器高が3.0cm～4.1cmである。1の端部は内面に面をもつ。内外面ともに回転ナデが施され、外面の天井部分にはいずれも反時計回りの回転ヘラケズリが施される。天井部内面には回転ナデののちに一定方向の静止ナデを施されるものが一般的である。なお1・2の坏蓋には焼成時の歪みが大きいものもみとめられる。

7～11は坏身で、口径が11.4cm～13.4cm、器高が3.7cm～4.9cmである。内外面ともに回転ナデが施さ

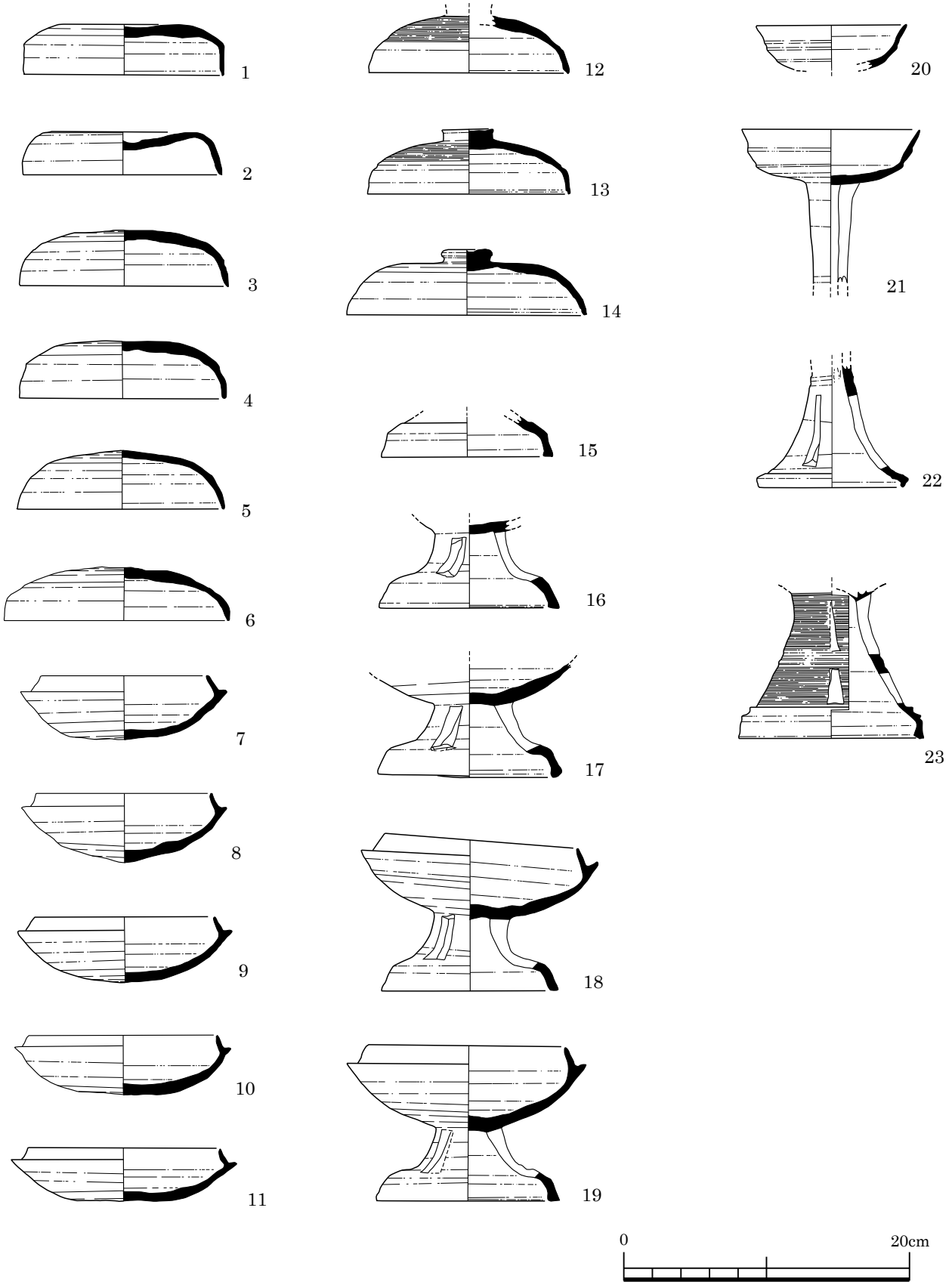

図５　中山横穴墓出土須恵器（1）(S=1/4)

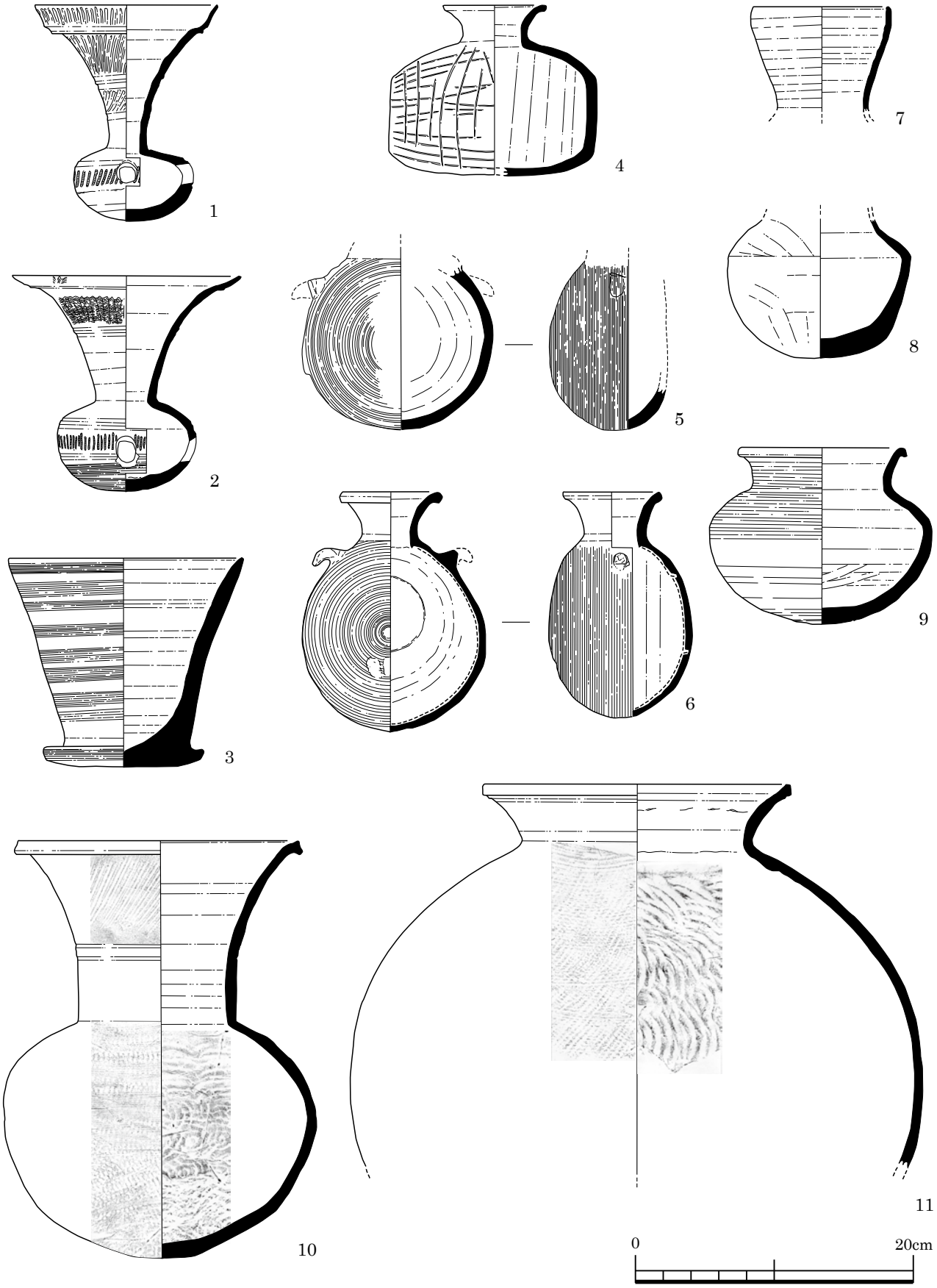

図６　中山横穴墓出土須恵器（2）(S=1/4)

れ、底部外面にはいずれも反時計回りの回転ヘラケズリが施される。また内面中央部付近には回転ナデ調整ののちに、静止ナデが施されるものも確認されている。

図５－12～23は須恵器の高坏である。12～14は有蓋高坏の蓋部である。口径が14.0～16.8cm、器高が4.5cm～4.6cmである。12・13は内面には回転ナデが施され、外面は回転ナデが施されたのちに非常に細かいカキメが施され、14は反時計回りの回転ヘラケズリが施される。いずれの個体にも外面天井部中央につまみが付く。つまみは中央部分をわずかに窪ませる。

15～19は短脚有蓋高坏である。坏部の口径は全体形状が判明するもので13.5cm～13.8cm、器高が10.9cm～11.0cmである。内外面ともに回転ナデが施され、外面底部付近には反時計回りの回転ヘラケズリが施される。脚部は高さ5.1cm～5.5cm、脚端部径12.4cm～12.9cmである。内外面には回転ナデが施され、3方向に1段の長方形透孔が穿たれる。脚端部はいずれも外方に強く踏ん張る。

20～22は長脚無蓋高坏である。坏部は口径が10.5～12.4cmである。内外面ともに回転ナデが施され、下半には回転ヘラケズリが施される。脚部は、内外面には回転ナデが施され、脚部中央には沈線が巡る。また内面には脚部成形時の粘土のしぼり痕が確認できるものもある。透孔は2段の3方向長方形透孔である。脚端部は一旦上方へ立ち上がり、下方に伸び面をなす。

23は坏部を欠損しているため全体の形状を復元するのは困難であるが、脚端部の形状から、有蓋高坏の脚部である可能性が高い。脚端部の復元径13.0cm、残存高10.3cmを測る。内面および脚端部外面には回転ナデが施される。脚外面中央に2条の沈線が巡り、カキメが施される。透孔は2段の4方向透孔であり、上段は三角形、下段は長方形である。脚端部は段を持ち、強く踏ん張る。

図６－１・２は須恵器甕である。1は器高15.6cm、口縁部径13.2cm、体部最大径8.6cmを測る。外面は全体に回転ナデが施されるが、口縁部にはヘラ描き文が施される。頸部外面は沈線によって3区画に分割される。1段目と2段目にはヘラ描き文が施され、3段目は無文である。体部は沈線により3分割され、1段目は無文であるが2段目には櫛描列点文が施され、3段目には反時計回りの回転ヘラケズリが施される。体部中央には透孔が1箇所あけられている。2は器高15.5cm、口縁部径16.4cm、体部最大径10.0cmを測る。外面は全体に回転ナデが施されるが、口縁部には波状文がみとめられる。頸部外面は沈線によって2区画に分割される。1段目には波状文が施されるが、2段目は無文である。体部は沈線により3分割され、1段目は無文であるが2段目には櫛描列点文が施され、3段目にはカキメが施される。体部中央には透孔が1箇所あけられている。内面は1・2ともに回転ナデが施される。

図６－３は須恵器すり鉢[3]である。復元口縁部径16.9cm、底部径11.6cm、器高15.0cmを測る。内面には回転ナデが、外面には回転ナデののち口縁端部から底部側面までの広い範囲カキメが施される。

図６－４は須恵器横瓶である。器高12.2cm、口縁部径7.4cm、胴部最大径14.9cmを測る。口縁端部は短く外反し、体部の小口部分は平坦面をなす。体部外面には全面に回転ナデののちに線刻が施される。この線刻は編籠を表現しているものと考えられる。内面は頸部から口縁部にかけては横方向の回転ナデが施されるが、体部は縦方向の回転ナデが施される。

図６－５・６は須恵器提瓶である。5は残存高13.1cm、胴部最大径13.8cmを測る。6は器高17.2cm、口縁部径7.0cm、胴部最大径13.1cmを測る。両者ともに、肩部に鉤状の把手が1対もつが、前者は両方の、後者は一方の把手が剝離・欠損している。前・後者ともに内面および外面の頸部から口縁部にかけての範囲には回転ナデが、体部外面にはカキメが施される。なお両者の体部内面にはともに、封じ孔を確認することができる。

図６－７～10は須恵器壺である。7は長頸壺の口縁部から頸部にかけての破片である。口径9.8cmで、残存高は7.5cmである。内外面ともに回転ナデが施される。口縁端部は直線的に上方に伸びる。8は壺体部である。残存高10.0cmで、胴部最大径13.2cmである。調整は内外面ともに回転ナデであるが、外面には静止ナデの痕跡も多数みとめられる。9は壺である。口縁部径11.8cm、器高12.7cm、胴部最大径16.1cmを測る。内外面ともに回転ナデが施されるが、体部下半に反時計回りの回転ヘラケズリが施される。また頸部から体部上半にはカキメが施される。口縁端部は短く外反し、丸

みをもって肥厚する。10 は広口壺である。復元口縁部径 20.2cm、残存高 30.0cm、胴部最大径 22.5cm を測る。口縁部には内外面ともに回転ナデが施されるが、体部外面は格子タタキののちに回転ナデが施し、タタキ痕を消そうとする。体部内面には同心円文当具痕が確認される。口縁端部は短く外反し、下方に突出するかたちで肥厚する。

図 6 － 11 は須恵器甕である。復元口縁部径 22.2cm、残存高 27.5cm、胴部最大径 41.2cm を測る。口縁部には内外面ともに回転ナデが施されるが、体部外面には格子タタキののちに沈線が施され、体部内面には同心円文当具痕が確認される。口縁端部は短く外反し、肥厚する。（前田俊雄）

Ⅳ．考察

（1）中山横穴墓出土陶棺の位置づけ

今回の資料整理の結果、中山横穴墓から出土した陶棺片は 4 群に分けることができ、そのうち少なくとも 3 群は 1 個体の棺として横穴墓内に採用されたことが確実となった。陶棺が一つの横穴墓内に 3 基出土する例は少ないが、大阪府柏原市安福寺 A 地点南 1 号横穴墓などの例がある[4]（川端 1971）。近隣の奈良市赤田 9 号横穴墓も 3 基陶棺が出土しているが、そのうち 2 基は円筒形である。

個々の陶棺の形態を検討していく。A 群は蓋部と身部に貼り付けられた垂直方向突帯が交差せず、互い違いになっている。また蓋長側面及び身短側面に円形の穿孔がなされている。陶棺のサイズは、陶棺の中央を焼成前に切断したと仮定するならば、3 行 10 列の脚部を有する、長さ 220cm 前後の陶棺に復元でき、陶棺の中でも大きな部類に属することが指摘できるだろう。

以上のような A 群の持つ外見的属性は、近隣の赤田 5 号横穴墓北陶棺と類似する。ただし、赤田 5 号横穴墓北棺は蓋段数が 3 段で構成される一方で、本陶棺は 2 段で構成され、絹畠編年では亀甲形 B2 型式に当たる（絹畠 2013）。また身受け部の突帯がやや下に貼り付けられることからも、A 群は赤田 5 号横穴墓北陶棺よりはやや後出するものと考えられる。

B 群は棺身部のみの出土で対応する棺蓋は認められなかった。身受け部は端部直上に水平方向突帯を貼り付けて構成され、全体的に厚みがある。また脚部に円形透孔が穿たれる。これらは陶棺でも古い要素であり、A 群に先行する可能性が高い。蓋部がないため、確実なことは言えないが、身部形態から赤田 5 号横穴墓北陶棺に近く、絹畠編年の亀甲形 B1 型式の可能性がある。

C 群の形状は A 群に類似するが、受け部の厚さ、突帯の幅に加え、胎土・色調などが異なっているため、別個体である。A 群よりも全体的に薄手の印象がある。A 群と同時期に製作されたものと考えられる。

D 群は A ～ C 群の陶棺とは異なり、身部側面の破片のみの出土である。また脚部・蓋部片が認められない、突帯を持たない、調整が内外面ともに刷毛目調整などの特徴を有している。そのため、陶棺 D 群は典型的な陶棺ではない特殊な形態と考えられる一方で、棺台や磚などの土製品の可能性があり、陶棺であってもそのような機能を果たした転用品の可能性が考えられる。

以上の陶棺の特徴を踏まえると、時期は B 群がもっとも古く、A 群と C 群は次段階のものと考えられる。時期はどちらも 6 世紀後半ごろと考えられ、次節で触れる出土須恵器の型式の年代観と矛盾しない。（絹畠）

（2）中山横穴墓出土須恵器の年代と性格

中山横穴墓からは多数の土器が出土している。第一に個々の土器の形態から編年的位置について述べる。またこの須恵器の年代をもとに、中山横穴墓における土器の器種構成についても検討をおこなう。

中山横穴墓から出土が確認されている器種は、須恵器では蓋坏、高坏、瑳、すり鉢、横瓶、提瓶、壺、甕と非常に多様である。また土師器では壺と考えられる小破片および器種が不明の小破片が確認される。以下須恵器のなかでも判断材料の多い数器種を中心として、土器の年代について検討をおこなっていく（田辺 1981）。

須恵器のなかでもその年代を考えるうえで重要となる器種として、蓋坏があげられる。中山横穴墓では坏身 5 点、坏蓋 6 点の計 11 点が出土している。坏身は口径がやや小さく器高が高い一群と、口径が大きめで器高がやや低く、立ち上がりも低い一群に分けることができる。これらの土器は前者が MT85 型式期、後者が TK43 型式期という時期が考えられる。一方の坏蓋は、焼成時の歪みの大きな個体を除外して考えると、器高に比して口径

が小さい一群と、器高が低く口径が大きい一群にわけることができる。これらには前者はMT85型式期、後者はTK43型式期という時期を比定することができよう。このように蓋坏はMT85型式期とTK43型式期の大きくふたつの土器群にわけることができる。

このように中山横穴墓出土の須恵器蓋坏は大きく二群にわかれることが判明した。ここからは蓋坏でみた二群の土器群の区分が、他の器種にも適用することができるのか検討をおこなっていく。

須恵器高坏には有蓋高坏と無蓋高坏が出土している。このうち無蓋高坏は坏部の形状が小さくて浅いことや、脚部径が細いことなどから、いずれもTK43型式期～TK209型式期という時期があてはまる。一方坏部の形状から有蓋高坏はMT85型式期を想定しておく。

須恵器𤮈は2点出土しているが、いずれも頸部が長大化している。ここでは頸部の文様に着目すると、図6－1は頸部を沈線で3区画にほぼ当分で分割する。1段目および2段目には櫛描文が施されるが、3段目は無文である。これに対して図6－2は頸部を沈線で2分割されるが、1段目より2段目の方が幅広である。1段目には細かい波状文が施されるが、2段目は無文である。頸部の長大化や頸部の文様構成から、前者はTK43型式期、後者はMT85型式期という時期が与えられよう（吉田2007）。

なお中山横穴墓からは須恵器すり鉢が出土しているが、古墳などの埋葬施設からの出土は稀である。須恵器すり鉢は現状では、少なくとも6世紀以降確認される器種である。出現期のすり鉢は把手をもつ、文様をもつ、といった装飾性があるものであるが、次第に無文化する傾向がある。このことから当資料はすり鉢のなかでも古い資料といえるであろう。なお須恵器すり鉢については、のちに詳述する。

またこのほかの横瓶や提瓶といった器種についてはその形態的特徴から、MT85型式期～TK43型式期という時期が想定されるが、提瓶に関してはその把手や口縁端部の形状などからより古い傾向がうかがえる。壺に関しては、大型広口壺（図6－10）は形状や文様構成からMT85型式期という時期が与えられるが、その他のものについてはいずれもTK43型式期以降の時期であろう。

ここまで中山横穴墓出土土器の年代を、須恵器を中心として検討してきた。これらの年代をまとめると、出土須恵器群は大きく二つに分けられる。すなわち、MT85型式期の一群（Ⅰ群）とTK43型式期を中心とした一群（Ⅱ群）である。Ⅰ群およびⅡ群の土器群の内容は以下の通りである。

Ⅰ群は坏身4点、坏蓋5点の蓋坏群、短脚有蓋高坏群、𤮈、大型広口壺1点ずつ、それに提瓶とすり鉢が組み合わさる可能性が高い。

これに対してⅡ群は坏身、坏蓋それぞれ1点ずつに無蓋高坏、𤮈1点、壺類で構成される。またこれらに、横瓶や提瓶が組み合わさる可能性がある。

中山横穴墓からは複数個体の陶棺が出土しているが、これらの土器群はそれぞれの陶棺に対応するものと考えられる。個々の陶棺と土器群の対応関係についてはのちの記述に譲る。しかし埋葬段階ごとの陶棺と土器の関係が明らかとなった点は重要である。

平城山丘陵では複数の陶棺の埋葬がこれまでに確認されている。そのなかでも陶棺と土器の関係が判明している古墳もいくつかあるが、注目すべき例に赤田5号横穴墓の例をあげることができる（奈良市教育委員会2016）。中山横穴墓のⅠ群の土器と赤田5号横穴墓出土土器はいずれもMT85型式期という時期が想定され、出土土器の器種にも高坏や𤮈、壺類をもつなどの共通性がみとめられる。平城山丘陵における陶棺の初現期において、陶棺に副葬される土器群に強い類似性がみとめられることは、初期の陶棺被葬者同士の関係を考えるうえでも重要であろう。またこの出土土器の多様性は陶棺被葬者の性格、地位を検討する際の一助となるものと考える。（前田）

(3) 中山横穴墓出土須恵器すり鉢について

中山横穴墓からは須恵器すり鉢が1点出土している。陶邑窯跡群においてすり鉢が焼成され始めるのは概ねTK43型式からであり（大阪文化財センター1976ほか）、外面にカキメ調整が施されるものはその型式段階のものが多く、その後は7世紀にかけて回転ナデ調整へと変化する。また初期段階には把手が付くが、のちに付かなくなる。今回出土したすり鉢もカキメ調整が施されることからTK43型式までの段階に含めて考えてもよいと思われる。

すり鉢の機能は内底面で対象物を「する」こととされる。一方で、底部外面に線刻・刺突が施され、また摩耗痕跡が認められる事例があることから、今回提示した図面の底部外面側を上面として、機能面とする論がある(小田 2013)。しかしながら、当初段階に見られる把手付すり鉢の形状などを考慮すれば、当初段階から底面を上面として機能面としたとは受け入れがたい。また後に底部外面を上面とするというその理解に至るまでにも、時期的に変化した、内面側と兼用で使用した、など様々な作業仮説を棄却する必要があり、今後の検討が必要であろう。

古墳からすり鉢が出土することは稀である。管見の限り、大阪府堺市野々井 25 号墳、京都府長岡京市井ノ内稲荷塚古墳、福岡県大野城市日ノ浦 1 号墳などが認められる。また直接古墳内に副葬されたものではないが、奈良県葛城市寺口忍海古墳群では、1 号墳と 2 号墳の間の楕円形の土坑内より、把手付のすり鉢が出土している(新庄町教育委員会 1987)。この土坑内には他に坏身・坏蓋・高坏・提瓶・壺・甕などが出土している。野々井 25 号墳は陶邑窯跡群、日ノ浦 1 号墳は牛頸窯跡群が近隣に所在し、両者とも被葬者と須恵器生産との関係がその立地から考えられる古墳であり、窯業生産とすり鉢との関係は気になるところである。すり鉢の本来有していた機能も含めて検討することが必要と考える。　(絹畠)

(4) 中山横穴墓の被葬者像

最後に以上の考察を踏まえて、中山横穴墓に陶棺が 3 基採用されるに至った背景とその被葬者像について考えたい。陶棺の初現は河内(古市古墳群近隣)地域と考えられ、その年代は現在のところ 6 世紀中頃と考えられる。奈良盆地へは 1 段階遅れて導入されるようであり、時期の古い事例としては奈良市赤田 5 号横穴墓があり、MT85 ～ TK43 型式段階の須恵器が共伴する(奈良市教育委員会 2016)。その後赤田横穴墓群は 7 世紀中葉まで陶棺を連続的に採用しながら造墓され、周辺地域でも陶棺が採用される。このように平城山丘陵周辺が奈良盆地内で土師系陶棺が最も採用されるコア地域であり、中山横穴墓もその地域内に属する。そして陶棺の共有の他にも須恵器の構成が赤田 5 号横穴墓と共通することが明らかとなった。また中山横穴墓の形態は不明であるが、横穴墓の形態も共通している可能性が高く、赤田横穴墓群との関係性が非常に強いものと考えられる。近畿地域において横穴墓群の分布密度が高い河内地域では、MT85 型式期から TK43 型式期にかけて高井田横穴墓群の造営が継続すると同時に、安福寺横穴墓群や玉手山東横穴墓群のように、玉手山丘陵周辺でも横穴墓の造営が拡大する(岩橋 2016)。平城山丘陵への横穴墓造営の拡大もほぼ同時期に進行しており、河内地域における横穴墓の造営拡大とも決して無関係ではないであろう。

2 章で論じたとおり、奈良盆地北西部は土師氏四腹のうち、菅原・秋篠土師氏の本拠地とされる(直木 1960)。土師氏は職掌として主に喪葬と土器生産に関することを担っていたとされる氏族である。溝口優樹氏は、「土師」氏はもともと「土部」と称しており、「土師」の字は鍍盤師・瓦師・薬師・仏師・画師のような「師」の字の着く技術者集団と同様、6 世紀末から 7 世紀以降に成立したとする(溝口 2010)。またその契機としては、新たに土器(「土師器」)の生産・貢納に携わったことを理由に挙げる(溝口 2010)。土師系陶棺は多くの点で埴輪製作の技術と同様の技術で製作されており、もともと埴輪を製作していた集団が陶棺製作をも担ったことは疑いようが無い。これらのことを踏まえるならば、のちに土師氏と呼ばれる「土師連」－「土部」という埴輪製作を含め喪葬全般を担った集団の一部が、埴輪祭祀の終焉、新たな土器の生産・貢納という職掌の変化の中で、集団のアイデンティティ維持・確認のために土師系陶棺を製作・採用したものと考えられる[5]。6 世紀後半という時期に平城山丘陵に造営され、土師系陶棺を複数採用した中山横穴墓も、その時点で「土師」集団であったかどうかはともかく、そのような集団の一員としての被葬者像が浮かびあがるのである[6]。　(絹畠)

V. 結語

以上、不時発見され緊急に遺物の回収が行われた中山横穴墓について、出土した陶棺と土器を報告し、それぞれの持つ特性・年代観、さらにはそれらを踏まえた被葬者像について考察してきた。不時発見ではあったが、多彩な陶棺片と土器を伴っており、奈良盆地における 6 世紀後半の横穴墓の良好な基礎資料となることが期待される。また近年奈良市教育委員会が調査・報告した赤田

横穴墓群が近隣に所在し、陶棺を採用するという点でも共通性がみられる。被葬者像も含めて、本報告を媒介としたさらなる研究に期待したい。　（絹畠）

本稿は、絹畠　歩・前田俊雄・持田大輔の３名の議論を踏まえたうえで、Ⅰ・Ⅱを持田、Ⅲ-1)・Ⅳ-2）を前田、その他すべてを絹畠が執筆・編集した。文責は各項目担当者に帰することを明記する。

註

1)　当時、調査および遺物の回収にあたられた須藤好直所員より当時の状況について諸々のご教示を得た。ここに記して感謝申し上げます。

2)　直木孝次郎は京北班田図中に「瓦屋里」の名称を見いだし、粘土造作を得意とした土師氏との関連性を指摘し、この地を「秋篠」として比定した（直木 1960)。

3)　これまでこの器種は「すり鉢」として報告されてきたが、その機能については考察で触れるように、未だ不明な点が多い。そのため正確には「すり鉢形土器」とすべきであるが、煩雑を避けるため、以下「すり鉢」と略して報告する。

4)　陶棺の分布が最も集中する「吉備」地域では、一つの横穴式石室内で３基以上の陶棺が採用される事例は多くある。多く採用される古墳としては、津山市小屋谷１号墳で７基の陶棺採用が知られる（村上編 1980)。

5)　赤田７号横穴墓、狐塚横穴墓群、歌姫赤井谷１号横穴墓などで認められる破砕した円筒埴輪を床面に敷く行為も、同様の理由のために行われたものであろう。

6)　ただし、中山横穴墓陶棺被葬者の生前の職掌がそのまま埴輪及び陶棺製作であったかは留保せざるを得ない。6世紀後半という時期には部民制の進行とともに氏族の再編成が図られ、被支配層は本来の親族集団とは切り離されて、部民として氏の組織の末端へと任意に編成されたと考えられる（田中 2006・2008)。中山横穴墓の被葬者たちも、そのような社会背景の中で新たな氏族集団へ編入された可能性があるからである。

引用・参考文献

岩橋由季 2016「河内地域における横穴墓の出現・展開とその背景」『考古学は科学か　田中良之先生追悼論文集』中国書店

大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団 2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第３冊

大阪文化財センター 1976『陶邑Ⅰ』大阪府文化財調査報告書第 28 輯

大野城市教育委員会 1994『牛頸日ノ浦遺跡群』大野城市文化財調査報告書第 42 集

小田和利 2013「須恵器擂鉢について」『九州歴史資料館論集』第 38 集　九州歴史資料館

川端眞治 1952「大阪府南河内郡玉手村安福寺境内横穴調査報告」『考古学雑誌』第 38 巻第３号　日本考古学会

絹畠歩 2013「古墳時代後期から終末期における陶棺の分類・編年と系統」『古代学研究』198 号　古代学研究会

新庄町教育委員会 1987『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告第１冊

田中良之 2006「国家形成下の倭人たち」『東アジア古代国家論－プロセス・モデル・アイデンティティー』すいれん舎

田中良之 2008『骨が語る古代の家族』吉川弘文館

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

直木孝次郎 1960「土師氏の研究　古代的氏族と律令制との関連をめぐって」『人文研究』11 巻９号　大阪市立大学文学部（1964『日本古代の氏族と天皇』塙書房、に再録）

奈良市 1968『奈良市史　考古編』

奈良市教育委員会 2016『赤田横穴墓群・赤田１号墳』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第４冊

平城村史編集委員会 1971『平城村史』

丸山竜平 1973「土師氏の基礎的研究―土師質陶棺の被葬者をめぐって―」『日本史論叢』第２輯

溝口優樹 2010「「土師」と土器の貢納」『史学研究集録』第 36 集　國學院大学大学院史学専攻大学院会

村上幸雄編 1980『糠山遺跡群Ⅱ』久米開発事業に伴う埋蔵文化財調査報告（2）　久米開発事業に伴う文化財調査委員会

吉田恵二 1973「書評　丸山竜平「土師氏の基礎的研究」」『考古学研究』第 20 巻第２号　考古学研究会

吉田知史 2007「文様と形態からみた後期古墳出土瑳の編年」『勝福寺古墳の研究』　大阪大学文学部考古学研究室

図版引用

図 1:時系列地形図閲覧ソフト「今昔マップ３」((C) 谷　謙二）により作成した地図を元に改変。

図 2~6：筆者ら作成。